

カーボベルデ共和国

【国名】

- 国名はアフリカ大陸の最西端に位置する「ベルデ岬（ポルトガル語 Cabo Verde で緑の岬）」に由来する。

【国旗】

- 1992 年に制定された現在の国旗は、青は海と空、白は国民の平和、赤は労働に対する情熱を表している。



カーボベルデ国旗

- また、国を構成する大きな島の数と同じ十個の星が島々と同様に円形に配置され、この円形は国民の一体性も象徴している。

【国土】

- カーボベルデは 10 の大きな島（1 つは無人島）と 8 の小島から成る火山列島であり、面積は 4,033 km²（日本の滋賀県程度）。首都はサンティアゴ島にあるプライア市（ポルトガル語で「海辺」）。人口は約 50 万人。
- 北東から貿易風が吹くことから、領土の北半分のバルラヴェント諸島（ポルトガル語で「風上」）と南半分のソルラヴェント諸島（ポルトガル語で「風下」）に分けられる。
- ソルラヴェント諸島の方が新しい火山で、フォゴ島の火山は頻繁に噴火を繰り返している。2014 年 11 月の噴火では溶岩流に流された農作物が大打撃を受けるなど甚大な被害を出した。



- カーボベルデの島々は火山岩でできており、山岳や荒れ地など荒涼とした風景が広がる。

【民族】

- 海外での出稼ぎが盛んであり、海外在住者（ディアスポラ）は約 70 万人とも言われている。
- 居住先はポルトガル、米国、フランスが多い。
- 毎年 7 月と 8 月は帰省するカーボベルデ人で飛行機が大変混雑する。
- 人口の約 7 割をアフリカ人とポルトガル人の混血が占める。約 1%のヨーロッパ人を除くと、残りはアフリカ系住民。

【言語】

- 1975 年までポルトガルの植民地であったことから、公用語はポルトガル語。
- 現地の人々が主に日常会話で使うクレオール語は島によって発音や単語が異なる。

- 周辺に仏語圏諸国が多いことから、政府関係者などはフランス語を話すことが多い。空港、ホテルやレストランにおける観光目的の会話であれば英語で意思疎通が可能。

【宗教】

- 人口の約 85%がキリスト教徒（内約 77%がカトリック）。イスラム教徒は 2%弱。

【サンティアゴ島】

- サンティアゴ島は国内で最も広い島で（991 km²）、人口の半数以上（約 27 万人）が居住し、首都プライアには全人口の約 1 / 4（約 14 万人）が集中する。
- プライアの旧市街プラトーはヨーロッパのようなパステルカラーの町並みが美しく、徒歩で散策できる。



大統領府（プライア）

- プライアから 15km 西に位置する旧首都シダード・ヴェリャ (Cidade Velha) には、西アフリカで最古の教会跡や高台の要塞跡が残り、2009 年に世界遺産に登録された。



シダード・ヴェリャ

- プライアから車で約1時間半北上すると手軽なリゾート地として人気があるタラファルのビーチがある。



タラファル市のビーチ

- 島の中央部は山岳な地形であり、ピコ・ダントニオのトレッキング、サン・ドミンゴシュの山中での静観とした風景も楽しめる。

【サル島】

- サル島の南側にあるサンタマリアには美しいビーチが 8km にわたって広がり、ヨーロッパの観光客が大挙して押し寄せる。
- この島の空港はリスボンやパリからの直行便が離発着することから、首都プライアの空港より利用客数が多い。
- 大規模なリゾート開発が続いており、国内の主要産業である観光業の発展を支えているが、コロナ禍で大きな打撃を受けた。
- 一方、開発に伴いウミガメの減少などの自然破壊も問題となっている。
- 島名の「Sal」はポルトガル語で「塩」を意味し、1940年代まで塩が輸出されていた。島の東部ペドラ・デ・ルーメの塩田跡が有名。今も残る塩湖は、死海のように人が浮かぶほど塩分濃度が高い。



サンタマリアの海岸



ペドラ・デ・ルーメ

【サン・ヴィンセント島】

- ミンデロはカーボベルデ第二の都市で、漁業と文化の拠点でもある。ミンデロ港には1960年代頃に日本のマグロ漁船が多数寄港。ミンデロの人たちは日本人船員の来訪を歓迎し、親しい交流が育まれて彼らのことを「サイコー」と言うようになり、「Sayko Dayo」と題する歌が作られた。この歌の歌詞には「サイコーダヨ」というフレーズが含まれている。



ミンデロの目抜き通り



ミンデロ港

- 現在でも中部大西洋で漁獲されたキハダマグロを冷凍運搬船に転載するためにミンデロに寄港する日本のマグロ遠洋漁業船がある。

- ミンデロはカーボベルデを代表する歌手であるセザリア・エヴォラ（Cesária Évora）の出身地であり、音楽の町としても有名。
- 毎年 8 月に近郊のバイア・ガシュ・ガータシュで開催される音楽フェスティバルには欧米からも大勢の観光客が訪れる。
- カーボベルデでは毎年 2 月に各地でカーニバルが行われ、ミンデロのカーニバルは特に有名。文化の街としてミンデロ出身者の誇りは高い。



セザリオ・エヴォラ



ラジーナ海水浴場

【サント・アンタオ島】

- この島には空港がなく、中心都市ポルト・ノヴォまでは、サン・ヴィンセント島のミンデロから船で約 45 分。
- 島の北側には険しい岩山が連なる絶景が広がり、谷間に緑の村々が点在する。こうした村々を巡りながら山道を歩くトレッキングコースがいくつもあり、マリンスポーツとは違った魅力で観光客を惹きつけている。
- サント・アンタオ島はカーボベルデで唯一水が湧き出る島で、雨が降らないカーボベルデで最も農業が盛んな地域。
- コーヒーやチーズの産地としても有名。



サント・アンタオ島の風景

【フォゴ島】

- フォゴ（fogo）とは、ポルトガル語で「火」を表す。
- 数十年おきに噴火を繰り返す活火山で国内最高峰のフォゴ山（Pico do Fogo）（2829m）周辺に国立公園が整備され、エコツーリズムで人気を集めている。
- しかし、2014 年 11 月の大規模な噴火で火口付近の村落の観光業や農業（特にワイン生産）が大打撃を受けた。このとき日本政府は 350 万円相当の緊急支援を実施した。
- ワインのほかに山羊チーズも有名。植民地時代にポルトガルから持ち込まれたコーヒー豆の生産も行われている。香りがよく生産量が少ないことから希少価値が高いと言われ、わずかながら日本にも輸入されたことがある。



フォゴ山

【カーボベルデの食文化】

- ポルトガル文化の名残が強く、ニンニクやオリーブオイルを利かせて素材そのものの味を活かした料理が多い。
- カーボベルデを代表する料理は、トウモロコシと豆をベースに野菜や肉を煮込んだ「カチューパ（cachupa）」。カチューパ
目玉焼きとチョリソーを添えることが多い。新鮮な海産物も豊富で、近隣のセネガルやモーリタニアでは消費されないタコもカーボベルデでは食される。
- ロブスターやマグロも有名。ただしロブスターは近年の乱獲によって個体数が減少しており、法令上は5月から11月までは禁漁。

- 海外で暮らすカーボベルデ人が故郷を懐かしむものとしては、「ボラシャ (bolacha)」と言われる厚みのないスコーンのようなビスケットがある。

【カーボベルデのお酒】

- 酒類としてはサトウキビの蒸留酒「グローグ (grog)」が特産。グローグにサトウキビのシロップを混ぜて果実を漬け込んだ濃厚な「ポンチ (ponch)」もある。グローグは食後に一気飲みされる。
- フォゴ島でワインの生産が行われているほか、若摘みされたブドウを使ったポルトガル産の vinho verde (vinho はワイン、verde は緑、若いという意味) も広く飲まれる。
- ビールは地元産の「ストレーラ (Strela)」とポルトガル産の「スーパーボック (Super Bock)」が人気。

【音楽】

- 食事やお酒と一緒に情緒豊かなカーボベルデ音楽を楽しむことができるレストランやバーがある。
- カーボベルデの音楽といえば、クレオール語で歌われる島唄「モルナ（Morna）」。2019年にユネスコ無形文化遺産に登録された。
- 代表的な歌手はミンデロ出身のセザリア・エヴォラ（1941.8.27-2011.12.17）。カーボベルデを離れて欧米で暮らす移民や出稼ぎ労働者の望郷の念をモルナに乗せて歌い、2003年にアルバム「Voz d' amor」（ポルトガル語で「愛の声」）でグラミー賞を受賞した。特にヨーロッパで広く知られ、カーボベルデの名を世界に広めた外交官であるとして、晩年は政府から外交旅券を発給された。現在、2000 エスクード札に描かれている。

